



# 力強い応援団

校長 猪股清子

同窓会の皆様には、日頃から多大なご支援とご協力をいただき、深く感謝申し上げます。

また巣立ちの 때가 きました。仁高生が力を合わせて過ごしたこの一年の活躍を、大まかに振り返ってみます。

## \*部活動

陸上部 (6月東北大会)

柔道部 (1月東北新人大大会)

山岳部 (12月クライミング全国大会)

写真部 (7月全国高校総会文化祭)

パソコン部 (9月WRO全国大会)

## \*地域貢献

BV会「Be助っ人」

ボランティアスピリット賞

小中防災授業・避難訓練協力

ボランティア多数

情報メディア科

ポスター制作多数

NCC 商品開発

フラダンス有志の会

ボランティア演技多数

## \*進路

就職内定率100%  
進学合格率100%  
(国公立大2名)  
今年度の部活動加入率は、運動部が45・9%、文化部が38・7%、合計84・6%で、全校で308名の生徒が活動を展開しました。

高校生にとって、部活動や地域と関わる活動の意義は大きいものがあります。時に困難を伴いながら、温かい喜びを運んでくれます。顧問や先輩後輩、地域の方々と切磋琢磨した時間は、今後の人生の確かな支えになるはずで。

すこし前に、交通安全の地域活動の中で、ある教員と再会しました。ちよっぴりやんちゃだった彼は、照れながら、「あの頃は子供だったと今は分かる。それを先生に伝えることができて良かった。これからは自分ができることはしていく。」と微笑んでくれました。そのたくましい姿を見ていると、温かいものが喉を通っていくような感慨を覚えました。

高校3年間を同じ校舎で過ごすということは、同じ根っこを持つということなのかもしれません。どんな木にならばどんな花を咲かせるのか、喜んだり悲しんだりするのも、身内のような親しみの気持ちがなせる技に違いありません。

127名の卒業生諸君、新たな旅立ちを迎えたこと、本当におめでとうございませう。これからは社会の中で自分自身を鍛え、7、574名の諸先輩とともに、同じ根っこにつながる未熟な後輩を厳しく鼓舞する応援団になってほしいと思っ

います。受け入れるだけでなく、「だめだ」と否定してやることの中に、本当の優しさがあると思うからです。来る11月11日に、同窓会の皆様を中心に、創立40周年記念式典を開催します。つながっていることを確認し合い、明日に向かう勇気を分け合いたいと思っ



# 卒業よ生り



偶然の積み重ね 佐藤 洋樹

間もなく卒業の季節を迎える大切な時期に、貴重な寄稿の機会をいただき感謝しております。

私は本校(仁賀保高校)を昭和55年3月に卒業し、4年後に秋田銀行に就職しました。同行では大館駅前支店を皮切りに、営業店を9か店、本部2回の合計11箇所を32年間で勤務しました。担当した業務は入社試験の結果をもとに、最初から同期で唯一の融資係となり、並行して担当した国際業務も含めて慌ただしい日々を送りました。また、その後も融資係を中心に勤務し、秋田市の卸町支店長、青森県の八戸支店長を務め

現場を離れました。一方、本部では2回とも新設部署の立ち上げに奔走し、対外的な折衝を含め、やや複雑な業務を担当しました。具体的には、約100店舗ある各店舗の予算策定や計数管理、銀行全体の3か年計画の策定、監督庁関連の業務等です。少し手に余りそうな業務を約5年間担当しておりましたが、27年8月に繰り上げ退職し、現在は縁あって秋田テレビに勤務しております。さて、私の職歴を中心とした概略は以上ですが、表題に関連してもう少し文章を繋ぎます。

どこの皆さんは偶然を



どのように捉えているのでしょうか。私は目指していることや、探していることとは別の価値があるものを結果として見つけることだと解釈しています。

私は父を亡くした本校の2年生まで、卒業後すぐに就職しようと考えていました。ところが闘病中に父を励ますつもりで勉強をしてみたところ、目新しさから案内順調に成績が上がり、残すところ約1年で進学に費用にも不安はありませんが、担任の先生より特待生になれば心配ないとのアドバイスをいただき方向性が定まり、また当時読んでいた五木寛之の小説の影響で目標とする大学も決定しました。いずれも当初から計画していたものではなく、偶然が積み重なって方向が決まったといった感じです。結果的には努力の甲斐なく第1志望校には合格できませんでしたが、他校の特待生に選ばれ4年を経

分が合格できなかった大学の卒業生達と切磋琢磨できる機会も偶然に得ることができました。

「ヘーゲルの「弁証法」の一節に「人は自分に真摯に向き合い続ける中で、らせん階段を上るように着実に成長する」というフレーズがあります。曲がりくねっているがゆえに堂々巡りをする感覚ではあっても、成長の裏付けに偶然という機会が訪れてくれるということだと思います。単調で真っ直ぐではない道であっても、らせん階段は上に続いています。そして歩みを続ける限り、様々な機会や人との出会いを偶然は用意してくれます。

在校生の皆さんも、自分の人生を大切に観点を、らせん階段をのぼってみたいかがでしょうか。それでは、多くの方に山の幸いな偶然が訪れることを祈念申し上げます。ここで筆を擱かせていただきます。

同窓会報第五号をお届けします。今年度は創立四十周年記念に向けての行事が多くあり、いよいよという雰囲気が高まってきました。卒業式での配布ということもあり、卒業生の保護者の方々もご覧になっていることと思います。中には、本校同窓生という保護者の方もいらっしゃるのではないでしょうか。創立四十年となれば、そのうち孫の代まで本校同窓生という三代同窓生も出てくるほどの歴史です。この先五十年、六十年と「母校の誉れ」を「継ぎ」ゆこうと思っ

そして、もし職場や近所に本校同窓生がいるという方には、十一月十一日の記念式典への参加を呼びかけていただければ幸いです。新聞やホームページで宣言を行っていく予定ですが、一番効果のある勧誘は「一口コミ」だと思います。同窓生の皆さん、記念式典でお待ちしております。

## 仁賀保高校創立四十周年記念事業実行委員会報告

教頭 佐藤久男

7月および11月、2月に実行委員会を開催し、事業の概要が決定しました。現在まで決定した内容は次のとおりです。(開始時間は予定です。)

- 記念式典 平成29年11月11日(土)
- 式典 本校大体育館 午後1時
- 開会行事
  - ・学校功労者表彰
  - ・永年勤続者表彰
  - ・記念講演会
- 祝賀会
  - ホテルエクセルキクスイ 午後4時半より(予定)
- その他の事業
  - ・記念公演「ケース&マサ」
  - ・招待試合 野球、バスケットボール
  - ・記念誌発行
  - ・記念事業 トレーニングルーム整備

詳細が決定次第、同窓会員の皆様にもホームページ等で式典や祝賀会のご案内をいたします。皆様お誘い合わせの上多数ご参加ください。

## 平成28年度仁賀保高校創立40周年記念事業実行委員会委員および組織図

|   |                                      |
|---|--------------------------------------|
| 会長<br>同窓会長 佐藤正樹<br>副会長<br>PTA会長 関守<br>校長 猪股清子                                   | 監事<br>佐藤美生<br>(同窓会)<br>工藤優子<br>(PTA) |
| 理事(8名)<br>同窓会副会長 亀山純、金春彦<br>PTA副会長 佐藤友章、菅原光子、小杉麗奈<br>教頭 佐藤久男 事務長 佐々木隆 総務主任 早藤素史 |                                      |
| 常任委員会 4部門27名(下図)  |                                      |

| 事業    | 分担                   | 同窓会           | PTA            | 学校                 |
|-------|----------------------|---------------|----------------|--------------------|
| 総務部   | 企画調整<br>庶務会計<br>広報宣伝 | 亀山純<br>山藤弘美   | 佐藤友章<br>藤原小    | 史幸り<br>素吉さ<br>藤田口さ |
| 式典部   | 式典付<br>表彰状<br>案内     | 金西春彦<br>村理希   | 金子英紀<br>成亮     | 史喜<br>弘弘<br>太田田    |
| 祝賀会部  | 会場準備<br>プログラム<br>受付  | 新美誠子<br>今野まり子 | 桜井文子<br>坂本恵子   | 史一<br>隆光<br>藤野     |
| 記念事業部 | 招待講演<br>記念誌発行        | 佐藤豊子<br>田陽子   | 松野めぐみ<br>野々木和政 | 朗也二<br>裕撰幸<br>藤幸   |

## 編集後記

同窓会報第五号をお届けします。今年度は創立四十周年記念に向けての行事が多くあり、いよいよという雰囲気が高まってきました。卒業式での配布ということもあり、卒業生の保護者の方々もご覧になっていることと思います。中には、本校同窓生という保護者の方もいらっしゃるのではないでしょうか。創立四十年となれば、そのうち孫の代まで本校同窓生という三代同窓生も出てくるほどの歴史です。この先五十年、六十年と「母校の誉れ」を「継ぎ」ゆこうと思っ